

# オーストラリアで学んだSFC

私はかつてオーストラリアのある大学に勤務しており、一九九四年の春、そこからSFCに着任した。新しく奉職するSFCとは果たしてどんなキャンパスなのか。南半球に居ながらこれを理解し、心の準備と授業準備をすることが着任前の私にとって最大の課題であった。そのために読みあさったものが三つある。

第一は、加藤寛学部長（当時）からいただいた書籍『慶応湘南藤沢キャンパスの挑戦』である。この書物では、日本における大学改革の必要性とそれを実現しようとするSFCが情熱をもって語られており、その教員に加われることの幸せを痛感した。第二は、SFC事務室から受領した「SFCガイド（授業案内）」および研究会シラバス（全教員のゼミの内容および授業計画の紹介）である。ここでは、個々の授業がいかに工夫されているかを具体的に知ることができ、自分の授業シラバスを作成するうえで良い手引となった。

そして第三の資料は、当時SFC事務長だった孫福（弘）さんからいただいた「慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスの取組み」という資料である。これは、ある雑誌に孫福さんが一年余にわたって連載された記事を簡易製本したものである。雑誌記事のコピーではあるが、書物一冊分の分量がある。

この資料は、私にとって実に貴重であった。なぜなら、そこではSFCの理念のほか、授業の特色、授業評価、入学選抜、新しい研究スタイルなど、SFCが総合的にかつ可能な限り統計データをもとに記述されており（例えばAO入試の面接方法や面接時間、メディアセンターの利用状況、教員オフィスアワーの利用率など）、また今後の課題も率直に記述されていたからである。このため、私のSFC理解はより深まることになった。

そして何よりも驚いたのは、このようにSFC全体を具体的、分析的、そして客

観的に書く能力を持った人物がキャンパス事務長を務めている点であった。通常の意味での事務トップならば、大学教育や研究のあり方、新制度の位置づけ、今後の課題といった最も本質的な点をこれほど自信を持って書くことはまず不可能である。SFCは、やはりこうした異色の事務長をいただいているからこそ、日本の大学改革を先導しつつあるのだ、と私は直感的に悟った。

着任後は、孫福さんの情熱、実践力、統率力などを直接目の当りにすることができた。その後SFCに関する自分なりの理解を取りまとめた小著『シドニーから湘南藤沢へ』を刊行し、三田本部にすでに栄転されていた孫福さんに献本した。その時にていねいなお礼メールをいただいた。「SFCのコンセプトを本当によく理解していただき、最初から参加された方たちの多くよりはるかに深くSFCの精神を体現していただいていることに、最大限の敬意と感嘆の念を抱いております」と。そのメールに接し、私は安堵するとともに、とてもうれしかった。私をそこまで運んでくれたのは、一つには孫福さんからもらったあの資料のおかげである。

あれからもう一〇年以上も経つ。ほとんどのページに自分でびっしり赤ラインを引いたこの資料を、いまなつかしく眺めている。